

京都が仕掛けた団体という壮大な花火は華やかに散った。「新しい歴史に向かって走ろう」のスローガンを掲げ、第一回大会が開かれた京都の地から二巡目のスタートを切った第四十三回国民体育大会（京都国体）秋季大会は二十日、全日程（六日間に）を終えて閉幕した。京都府は予想通り天皇杯（男女総合優勝）を獲得し、団体成功の胸酔感に酔いしれているが、十年がかりで取り組んできた新生国体は京都、そして団体の歴史に何を残したのか。豊かなニッポンの国民大運動会の慶典をよみ返ると、今回の国体は教育の進め方などに特づけられた京都の「戦後」に終わりを告げ、同時に二巡目以降の国体のあり方を考えさせる。



池田 知隆 (京都支局)

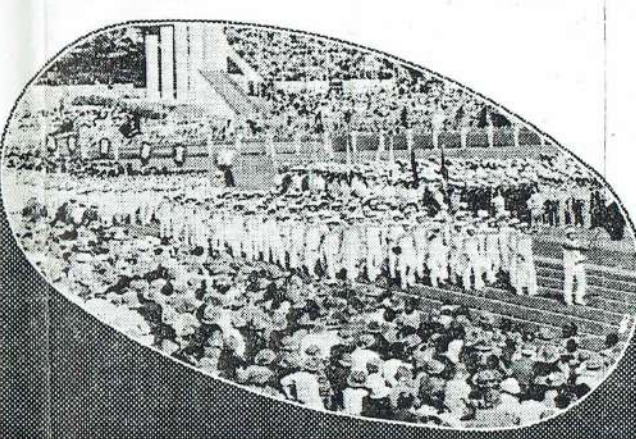
記者の目

七十教育施設に一齐に日の丸が掲揚を新設した。高校三都国体では一会場、「君が代」原則など「戦後教育」の旗頭を自負してきた「京都の教育」にどうして、府立高校での日の丸掲揚は転換を示す象徴的な出来事だった。さうに京都府教は六十二年春、終まり合い、自治体関係者を君が代のテフを小、中学校に配って武典での君が代演奏を強く指導した。これに反対する市民団体が翌六十二年一月、君が代撤制に反対して訴訟を起こすなど、府内は「日

も「国旗掲揚」を明確化。京一ツへの意気と情熱に燃えていたと当時、連登にあつた藤田部長はいう。今回の京都国体は戦後日本の復興とどうも肥大化した団体の原風景を見つめ、「見直し、みんなを真心で」の頭文字から「スリム（3M）精神」をうたい上げた。だが、京都府が団体の施設二巡目を迎えた京都国体の開会式西京極陸上競技場で15日

京都の「戦後」に終わりを告げた第43回国体

「国体って、まるで共通一試験みたいなものだ」。昨年春、京都に転任してきて間もなく、「国体まであと五百日」の記念行事として開かれた標準設立発表会取材した時に思った。ホテルの大広間を借り切り、地方議員や町村関係者が勢ぞろいした大試食会。たかが食事、どころではない。戦後の食糧難の時代ならまだしも、「飽食の時代」といわれるいま、大会期間中に全国から来る選手・監督など三万人に出す朝、昼、晩の三食を統一メニューにし、「京の味」を知ってもらおうというのだ。南北に細長い府全域で毎日新鮮で同一の調理材料を調達するのも大変だが、参加者と同じ食事を出さないと公平な競技が出来ないという発想にまず驚いた。



「戦後」政治に終止符を打つ役割を担ったといえないか。

復活した君が代と日の丸

ある京都府工芸会館の小倉隆一・副会長は力説し、藤田静夫・京都府選手団長も「千年の都として固められた公家文化で、京都人は上意下達の暮らしに慣れ、物事に冷ややか。国体をやってこそ施設整備ができるし、温厚意識が弱い京都人の思いを一つにできる」と強調した。京都府が国体に名乗りを上げた昭和五十二年は、戦後の京都に若返りしてきた鶴川虎三知事の革新府政が終え、林田悠紀夫・現法相が「府政に新風を」と知事に就任した年。国体誘致を表明した林田知事は、地城のスポーツ振興と市民の健康づくりを掲げた府民運動を通じて鶴川革新府政の一掃を図った。意識改革キャンペーンが、その路線に沿うものだった対象は否めない。

肥大化した国体の原点

昭和二十一年、京都を中心整備に投入した事業費は約三億円。開かれた国体の第一回大会は、GHQ（連合国総司令部）により集約的行政や宗教的行動および団体の強化を目的に、これに用地費を円に匹敵し、これに用地費を加える膨大な額にのぼった。「受け入れ側の京都府は各選手団の宿舎近く、かつて社会体育施設は六十四カ所に増えた。団体道路が府内に合はるために自衛隊員まで動員された。一方、競技運営面でも新しい試みがいくつも行われた。中学生の初参加、生涯一度限り出場できる成年二部の新設による参加層の拡大などである。また開閉式が全種目フリーパスで出場できるフルエントリー制は存続した。

「共通一試験」な行動様式
二年がかりで調理師、栄養士が事細かな検討を重ねた。食中書が心配だからと、

大きく変わった「戦後教育」
国体開催までの半年で、京都府は確かに変わった。府教育委員会は六十二年夏、府内の

「いつも東京が優勝したら国体は盛り上がる。半世紀に一回しか国体が行って来ないのだから、開閉式に花をもたせてもいい」と日本体育協会幹部。その結果、昭和三十一年の新潟国体から続く開閉式は今回で連続二十五回になった。「府民が力を合わせた結果だ」と荒巻府知事は顔をほころぼせる。国体は都道府県の競争意識をかきたて、地方の不満を吸収して開閉式を元気づける地方振興の日本的な知恵かもしれない。天皇陛下のご病状の悪化で開会式での花火は自粛されたが、戦後の終わりを告げる花火は確かに上がったのだ。ただ私が気になるのは、京都国体に参加した二万人に、食事メニューが極端に画一化された。日の丸の掲揚や君が代斉唱が徹底された。なんと二巡目を迎えた国体に管理的、画一的な発想が強まっていることである。このような傾向からどのように脱却して市民スポーツの祭典をつくり上げていくのか。地方に「夢」を投げかけながら、地城ナショナルリズムをほぐす国体は、京都から次回開催地の北海道、その次の福岡へと今後会場を移していくが、その流れをしっかりと見極めたいと思ふ。

(第3種郵便物認可)

共通一試験な行動様式

二年がかりで調理師、栄養士が事細かな検討を重ねた。食中書が心配だからと、

大きく変わった「戦後教育」
国体開催までの半年で、京都府は確かに変わった。府教育委員会は六十二年夏、府内の

「いつも東京が優勝したら国体は盛り上がる。半世紀に一回しか国体が行って来ないのだから、開閉式に花をもたせてもいい」と日本体育協会幹部。その結果、昭和三十一年の新潟国体から続く開閉式は今回で連続二十五回になった。「府民が力を合わせた結果だ」と荒巻府知事は顔をほころぼせる。国体は都道府県の競争意識をかきたて、地方の不満を吸収して開閉式を元気づける地方振興の日本的な知恵かもしれない。天皇陛下のご病状の悪化で開会式での花火は自粛されたが、戦後の終わりを告げる花火は確かに上がったのだ。ただ私が気になるのは、京都国体に参加した二万人に、食事メニューが極端に画一化された。日の丸の掲揚や君が代斉唱が徹底された。なんと二巡目を迎えた国体に管理的、画一的な発想が強まっていることである。このような傾向からどのように脱却して市民スポーツの祭典をつくり上げていくのか。地方に「夢」を投げかけながら、地城ナショナルリズムをほぐす国体は、京都から次回開催地の北海道、その次の福岡へと今後会場を移していくが、その流れをしっかりと見極めたいと思ふ。

このページへのご意見は毎日新聞社「記者の目」デスク（東京都千代田区二ツ橋一の一）または大阪府北区堂島一六の二〇〇までお寄せください。